

生きなきゃ生かせない資源がある

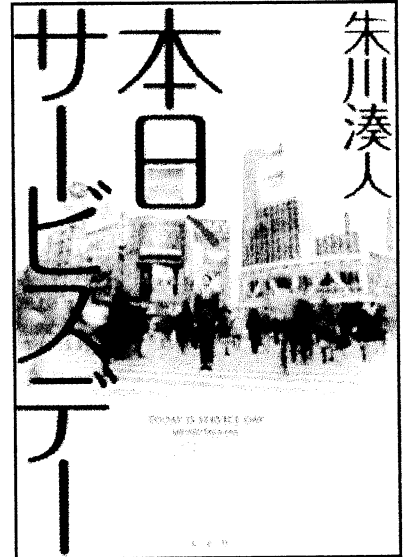
みやざき中央新聞 2017.6.26 号 水谷 謹人

朱川湊人の短編小説『蒼い岸边にて』より

前略・・・この話の主人公は、生きていくことがつらくて自分の部屋で睡眠薬を大量に飲み、自殺を図った20歳の女。

気が付くと目の前に大きな川があった。そこに口の悪い男がいた。「今から向こう岸に連れていくので舟に乗れ」と言う。ところが、やってきたその女をじっと見て、男は嫌な顔をする。「なんだおまえ、寿命前か。厄介なのが来たな」と。

厄介な理由とはこういうことだ。亡くなった人は皆、この岸边で「魂離れ^{たまはなれ}」をする。寿命でなくなると、焦げつかないフライパンで目玉焼きを作ったみたいに魂がきれいに体から離れ、川を渡って向こう岸に行ける。しかし寿命前に自ら命を返した人は鉄のフライパンで油もひかずに目玉焼きを作ったようなもの。魂が体にへばりついてなかなか離れない。船頭役の男は、魂が体から離れるまで待たなければならないのだ。



「じゃあ、待っている間に『未来ゴミ』を捨てておくか」と言って男は大きな袋を女に見せ、中から卵のような形をしたものを取り出した。

「何なの？」と聞く女に男は「これはおまえがこれからつかむはずだった未来だ。しかし、自分の都合で命を返した奴にとってはそういう未来が全部ゴミになるからこれから処分するんだ」と言って川に投げ込んでいく。

男は少し意地悪に「これは何だと思う？」と言って、「未来ゴミ」の中身を教える。「これは高校時代の同級生・〇山△子との友情だ。もし生きていたら2か月後に偶然街角で彼女と再会し、意気投合して、それ以来、生涯の親友となるはずだったが、おまえが死んだのでその未来がなくなった」、そう言って川に投げ込んだ。

次の「未来ゴミ」は、1年後に出会うはずだった恋人。「その恋人は二股を掛けていて、おまえは失恋するんだ。でもその失恋はおまえの人生には必要だった。おまえは失恋をバネにしてダイエットに成功し、化粧の勉強もして、見違えるほどきれいになる」と男は言う。

そして「結婚して2児の母になる」という「未来ゴミ」も処分される。処分しないと、彼女と結婚するはずだった男性は別の女性と出会えないからだ。

「将来出版するはずだった絵本」という「未来ゴミ」もあった。女は子どもの頃から絵本作家になるのが夢だったが、自分には才能がないと諦めていた。「そう思い続けて生きるのはおまえの自由だ。しかし、努力は時として才能を越えるぜ」、そう言って男は残念そうにその「未来ゴミ」も川に投げ捨てた。

そうこうしているうちに「魂離れ」は進み、男は女を舟に乗せ、岸を離れる。女の体と魂をつないでいたものが1本の糸ほどの細さになった時、女は「もう一度生きたい」と男に懇願する。

たまに生死の境をさまよって息を吹き返す人がいるが、もしかしたらこんなやり取りをしたのかもしれない。

以前、「捨てればゴミ、生かせば資源」というキャッチコピーがあった。「未来」はまさにそうだ。生きなきゃ生かせない。